
仮面ライダー×魔法少女 龍騎&まどか クリスマス特別編 聖夜に舞うは幸せの雪

ボロット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×魔法少女 龍騎&まどか
クリスマス特別編
聖夜に舞うは幸せの雪

【Nコード】

N8148Z

【作者名】

ボロツト

【あらすじ】

一年に一度のクリスマス、浮かれに浮かれるまどかとさやかはパーティーのためにマミさん宅へ向かいます
しかしそこで待ち受けていたのは予想だにしない状況で……

『孤独くいま>を変えるは龍の騎士』のメンバーが送るクリスマスのひと時

前編

「インキュウバーインキュウバーベルが鳴るっ」

諸君、冬である。12月である。年末である。それ則ち、

「ほーんじつー愉快っな！ クーリスつまっス！！」

「へーいつー！！」

そう、ボーカル我が嫁鹿目まどか合いの手あたし美樹さやかでお送りした通り、何を隠そう今日はクリスマス聖戦なのだ。

いつもならば窒息さえ辞さないから失せろと思う肌寒い乾燥した空気も、今日という日に限っては全身全霊をもって全面的に祝福してやるっじゃないか。

「ってなわけで見滝原の皆様及び万物！ メリークリスマス！
」！

「クリスマスー！！」

いつもならば一目を気にし、あうあう言いながら宥めて来るまどかも、今日と言う日は一緒になって声を張る。道行くおっちゃんは何事かと目を剥いたがお構いなしだ。

毎年、少なくとも小学校であたしと知り合っただけからまどかは、欠

かすことなくこの状態になる。
皆様方も覚えがあるのではないだろうか？ クリスマスから大晦日、そして大晦日にかけての年末年始における、独特の空気というやつを。

どういうわけかは知らないが、まどかはその影響をダイレクトに受ける。おはようからお休みまで頬は『にぱーっ』と緩みっぱなしだし、一挙一動の度に漏れなく『まどまどまど』となんか妙な擬音が聞こえて来るような来ないような。

まあーとにかく重要なのはただでさえ天使なまどかがこの期間中はさらにかわいいってことさ！

「ヤッベまどか可愛いマジ可愛いもうあたし百合っ子でいいやねえチユーしていいチユー？」

「頬つぺたにならないよ！」

「わーお表情は緩くなっても締めるとこ締めてるなんてまどかつたらしっかり者ー！」

「えへへー」

って違う。あたし達は何も世界に向けてイチャコラを発信するためにここにいるんじゃないよ。っーわけで見世物じゃあないんだから息荒げて見てんじゃないわよ愚民共めが金取んぞコラ。

「ちよっと急ごうかまどか、時間には余裕あるけどこのまま視姦されてんのは我慢ならない」

「し、か……？ クリスマスに来るのはトナカイさんだよ？」

「OKまどかがマジ天使なのは分かったらマジで急ごう」

ヤバいぐらいにかわいらしい発言は一生聞いておきたいくらいだけれどもいかない。実際周りの息の荒さが三割ぐらい強くなった（気がする）。

そんなわけであたしはまどかの手を握ると急いで走りだした。盗んだバイクがないのはちょっとばかり惜しいけれど。

- - -

そもそもに、何故あたし達がこんなケダモノ溢れる欲望の町に踊り出たかと問われれば、それはマミさんのマンションへと行くためだと答えよう

何を隠そう、本日我々は夕刻より『ドキッ！（ほぼ）女だらけのクリスマスパーティー<ポロリもマミりも無いんだよ>』を開催予定なのだ。タイトルについての突っ込みは感想欄までどうぞ。

そんなわけで今が駆け抜ける時とばかりに全力疾走。息が上がって頬も火照ったまどかの良い感じの色っぽさを横目で堪能しながら走る走る走る。

ウオンあたしはまるで人間風力発電器だとわけの分からんフレーズが脳裏を過ぎて約三分後、目的地であるマミさんのマンションが見えた。

そんでそのエントランス手前にもつとえげつない何かが見えた。

「……………」

我らが（一応）主人公、仮面ライダー龍騎こと城戸真司その人である。噂では全国100万越えのマミニスト達に首を狙われているらしいとのこと。ちなみにあたしもその内の一人だ。我が家の家宝さやかちゃんブレードが煌めく日もそう遠くはないだろう。

そんな感じの憎悪の焦点たる真司であるが、その様子がどうにもおかしい。

というか現在正座真つ最中である。冬空の下でオン・ザ地べた、さながらMD5（マジで土下座る五秒前）のようにさえ思える。

「……………」

で、その前には、暴君の如く君臨しながら、しかし雪原に咲く一輪の花のように力強さと美しさの両立を見事に実現した人類の至宝、巴マミさんのお姿が。

いつもならば余裕と安らぎに溢れたその表情がなぜだか今日は酷く硬く堅くて固い。

目なんか空裂眼刺驚でもブツパしそうなまでに冷たい。いやまあ確かに髪色同じでカリスマ性も勝るとも劣らずな感じですけども。

そして、そしてである。

それだけの状況だったならば『クソ痴話喧嘩かよクソがもういつそ逆に犬に食われちまえよクソ』と内情にて吐き捨てるだけに留まり、今のようにまどかの耳たぶを揉み倒すことでなんとか平静を保つような必要はない。

断続的に漏れてくる喘ぎに有りもしないシンボルが落ち着けというあたしの思想に反旗を翻し蜂起しそうになるが、んなことはどうでもいい。

今重要なことは、真司、マミさんに続く第三のピースの存在。

「????」

赤い衣服の女の子・・・と言うにはあたし達よりちとボンツキユツボンツな・・・が二人の間で視線を行き来させている。

どうしようどうしようと言葉にこそ出していないが、見た目表情ふいんき（何故か変換できryk）ありとあらゆる要素から困惑っぷりがこんにちわしている。

正座真司にマジギレマミさん、そこで謎の間女とくりゃあ、導きだされる答えは一つ。

「……………昼間っから修羅場っスか」

「ち、違うよ！ 全然違うよ!!」

なんとも耳聡いことにあたしの呟きをナイスキャッチした真司が大慌てで弁明の声をあげた。

でもね真司、貴方の前の霸王様はそう思っていないみたいだよ。

あつ、ちなみにまどかの目には目隠しメイドインあたしが付けられてるので「安心を。それ抜きにしてもなんかグツタリしてそれどころじゃないっばいけど、やっべえ耳たぶ弄り過ぎた。」

「つてかちようどいい所に来た二人とも！ 俺の話を聞いてくれ！！！」

「遺言ってちゃんと形に残るようにしないと無効じゃなかったけ」

「違うわまだ生きたいよ俺は！？ ……あれ、まどかちゃんどうかしたの」

「まどか、女の悦びを知るの巻」

「いや意味分かんない」

オイオイ何呑気に突っ込みなんてしてやがるんですかねこの怪人唐変木男は。

「……………」

ほら見るママさんめっちゃこっち見てる怖い恐い強い……………最後の
は違うか。

ああいう状況に陥ると相手が何しても憎らしく思えちゃうからね。
いわゆる『箸が転がっても果てしなき憎悪が我が胸を貫きその姿を醜く強靭な悪魔へと変える』というやつだ。

しかしマミさん、無言でギリリと<タカ!>のように双眸を鋭く光らせるが、ただそれだけで何を言う訳でもない。<トラ!>やら<バツ!>のような雰囲気は一切ないので残念だったな貴様ら。どうやらまずはあたし達に真司の話を聞いてもらいたいらしい。良妻精神が惚れた相手を蔑ろにすることを許さなかったのか、聞けばどちらがおかしいかすぐに分かるかと確信があるのか。とりあえずあたしは謎の女性のオロオロっぷりを楽しみつつ、真司の話に耳を傾けることにした。

- - -

〜朝の出来事〜

- - 証言開始 - -

いいか！？ 今から話すのは全部ホントの話だ！ 頼むから信じ
てくれよ！？

俺、今朝マミちゃんより早く準備が終わったんだ

だから下でまどかちゃん達を出迎えようと思って、マンション
を降りた

それでエントランス前で立ってただけで、いきなりドサツ！
ってなんか生々しい音が、俺のすぐ横から聞こえてきた

俺『なんだっ！？』ってなって、咄嗟にそっちを見て、そした

ら……

そしたら！ この女の子が倒れこんでたんだ！ さっきまで誰もいなかったのに！

- - -

「……………」

「……………」

何と言つことだ……………！

「文字だけで逆裁っぽくするのがこんなにむずいなんて……………」

「何の話だ！？」

「さやかちゃん、とりあえず全部【ゆさぶって】おこつよ」

「分かったよまどか……………」 『待った！』 「

「何なんだ！？ 俺に一体何を求めてるんだそれは……………」

「くそ……………」 【ゆさぶる】をしてもまるで【ムジユン】が見つからない……………！」

「落ち着いてさやかちゃん、こついう時こそ『発想を逆転』させるの」

「『発想を逆転』……そうか！ 『何故女性が現れたか』ではなく、『真司が何処の店から女性を連れて来たのか』を考えれば！」

「それ発想の逆転つてより発想の飛躍だろうが頼むから真面目に話聞いてくれないかなもおおおお！！？」

そうおっしやいますがね真司さん、そんな荒唐無稽な癖に圧倒的にユーモアの欠乏した話をマジで聞こうという殊勝な人間が今の御時世にどれだけ居ようと言うのか。

あのまどかでさえ……あらやだなにこの子スゴイ真剣な面持ち。日本はまだ終わっていないかったんだねやっただぜマミさん。

「……嘘をつくにしても、もう少しマシなものはなかったの？」

「だ、だからあー！！ 嘘じゃないんだってばホントにい！！」

マミさんの視線が放つぜったいれいどが真司へと直撃する。それで『いちげきひつさつ！』されてたら真司も楽になれたんだろうが、そうは問屋が卸さず且つそんなのあたしが許さない。

さあ皆様お待ちかね、マミさん怒りのティロ・フィナーレの上映で

……

「なんで……」

あれ？

「なんで……なんで？ わたし、凄く楽しみにしてたのよ？ し、真司、さんと、はじ、初めてのクリスマスっ、だからって……なのに、それなのにいい………」

ぼろぼろ、ぼろぼろ、マミさんの小さな瞳から大きな滴が流れ落ちる。

あたしはその滴の名前を知っていた。それがどんな時に流れるのかも。

だから、あたしはやばかった。流させる真司に対しても、あまりに軽く見ていた自身に対しても、握った拳が光って唸り、奴を倒せと

「あ、あのっ！」

「……！」

輝き叫ぶ、その前、真司が無意味であろう言い分を口にしようとした直前、赤衣の彼女が声を上げた。

というかむしろ渦中の人だったにも関わらず今までよく黙ってられたもんだ――と一瞬思ったが、よくよく考えれば渦中の人だからこそマミさんの威圧感をもろに喰らってしまうわけで、それで泣いたりしてないぐらいだからむしろ彼女は頑張った方なのだろう。

「その、えと、ごめんなさい！！ わたしのせいで、あらぬ誤解を与えてしまっているのですよね！？」

彼女が深々と頭を下げる。マミさんは何か言おうとしているようだが、言葉にならずただ口をぱくぱくぱく開いて閉めて開いて閉めて。

仕方ないことなので、代わりにあたしが前に出る。

「ちょっといいですかお姉さん？」

「は、はい！ なんででしょう！？」

ハキハキとして元気の良い、若者らしい声だ。とてもそういう如く何わしいお店で働いている女性には思えなかった。

「えーっと、誤解を与えたって言うけど、自分ではどう誤解させたって思ってるの？」

「それは、彼とわたしの関係や、彼が嘘をついているって言う……」

ふむ、と顎を一撫でし、空を見上げる。

どうやら彼女の言い分では真司の言ったこと、つまり『彼女が落ちてきた』ということとは揺るぎない事実らしい。

自殺を失敗したには、表情は申し訳なさに満たされてはいるが決して暗くはない。
はてどういうことか、今一度彼女の頭から爪先までをまじまじと眺め……

(……ん?)

ふと、彼女の姿と何かの像がW、もといダブる。
先程から彼女の容姿を『赤衣』としか表現していないが、厳密に言えば赤一色ではない。
モコモコと温かそうなコートと、白のストッキングを纏った足をスラリと伸ばす絶対領域完備のミニスカート、その両方共に赤地に白い縁取りという同一の作り。

「……ちよっと、変なこと訊きますけど」

「な、なんでもどうぞ!?!」

あたしの言葉に、彼女はぐいっと一歩近づいた。肉薄の勢いで彼女の長髪が、美しい銀色のそれが柔らかく揺れる。光の反射からか、あたしには一瞬それが白髪はくはうのように見えた。

「もしかしたらだけど……いつもは帽子被ってたりする?」

「えっ、よくご存知ですね!?!」

「マジかー被ってるかー……よければですけど、今ここで被ってもらえるってことは………」

「分かりました、失礼かと思って外していたのですけれど、そういうことであるならば」

言って彼女が手を突っ込むと、次に出て来た時にあたしが思い描いていたものと一分足りとも違う代物を連れて来た。

先の尖ったニット帽、他の衣服と同じように赤地と白の縁取り。さらに尖んがりの先端には白色の、なんかボンボン……ポンポン？したものが。

それを被ってくれた彼女のシルエットもまた、あたしの予想と完全に一致したもので、

「……最後に、もう一つだけ」

一本指を立てて、古きよき刑事モノの主演達が多く口にしてきた言葉の後に、キョトンする彼女に対して、最後の言葉を【つきつける】……『くられー!』

「あなたは……【サンタクロース】ですか？」

「はい、そうです」

「ふふふそうかそうかやはりそう簡単には認めぬかってかつるー
い！！」

ズコーツと世間にもはやバナナの皮の不要を知らしめる素晴らし
い滑りっぷりを披露したのと、真司がママさんを泣き止ませるため
の『主人に先立たれた化け物サイの真似』を盛大に滑ったのは全く
の同時だった。

二つの滑りが交差する時、物語は始まる！！

- - -

【サンタクロース】であるらしい彼女 - - メリッサ・クロリア、
愛称『羊と戯れないし悪戯電話もしない方のメリーさん』略してメ
リーさんの言い分を一言で纏めると、『脇見運転してたらハンドル
操作狂ってソリから投げ出された』らしい。

とんだ慌てん坊のサンタクロースも居たものだ - - で済ませたい
ところだが、メリーさんの付け加えた更なる一言でそうも行かなく
なってしまった。

曰く、『乗せてた荷物もこの町の何処かに吹っ飛んでしまった』そ
うだ。

ここで言う荷物とは彼女がサンタだということを確認するならば、ま
ず間違いなく『プレゼント』なのだろう。彼女らサンタが夜な夜な
家屋に侵入しては足袋に挟込んで行くアレだ。

余談ながらあたしは上の定義としてクリスマスの贈り物を賜ったことは一度もない。ちんまい頃から赤衣の老人からでなく、スーツ姿の父さんから視線を搗ち合せたままに手渡しされてきた。

父さんとしては見知らぬオヤジにプレゼント贈与という栄誉を奪われるのが癪だったのだろうが、それにしてももう少しロマンを解して欲しかったもんである。そうすれば無知なあたしが無邪気なままに桃色な友人の淡い幻想をぶち殺してしまうことはなかったはずだ。とまあそんな寂しいあたしだが、プレゼント紛失がちびっ子達にとつてどれだけのことはさすがに分かる。

「そんな訳でさやかちゃん達はメリーさんを助けてあげることにしたのでした」

「何ぶつぶつ言ってるのさやかちゃん？」

「いや状況が混乱してきたからさ、ちょっと整理してた」

「本当にごめんなさい、変なことに巻き込んでしまいました……」

「大丈夫ですメリーさん！ 困った時はお互い様です！ それに今宵はクリスマス・イヴ！ みんなが幸せじゃなきゃダメなんです

！……」

「本来わたしは幸せを振り撒くべき存在なのですけれどね……」

「まどかストップ、この人慰めるほどへこむタイプだ」

その天使っぷりを遺憾無く発揮するまどかを嗜めながら、ちらり

と視線を横へと移す。

「本当にゴメンなさい！！ 真司さんはずっと本当のこと言っていたのに、わたしは……」

「だから気にしなくたっていいってば、俺も焦りすぎて無茶苦茶な言い方しか出来てなかったし」

「でも……」

「それにしても、まさかママちゃんが俺とのクリスマスをそんなに楽しみにしてくれたなんてな。正直それが嬉しすぎて、疑われたことなんてもう微塵も気にならないよ」ナデリコナデリコ

「っ！ あ、頭を撫でるのは止して！ 子供じゃないんだから！」

「あっ……ああ、そうだよな、ゴメンゴメン」

「……嘘」

「え？」

「やっぱり……もっと、して？」

「あ、ああ、分かった」

……あー、まあ、えっと……

「……………ゴフッ」

「なんかお吐きになられた!? だだだ大丈夫ですか!？」

「もうダメだよさやかちゃん、また砂糖吐いちゃって」

「『また』なのですか!？」

「ゴメンゴメン、あんまり甘甘なのを見るとついね」

(これが普通なんだ……………やっぱり事件は現場で起きてるものなんだ……………)

ってか何アレ何なのアレ何だというのアレ。

ちよいと上気した頬に熱を帯び潤んだ瞳そしてそこに更に不安と期待が黄金比の上目遣いって何それ何コンボなの何メダルなのねえ。

くそう…此処にはクリスマスに友人とチキンとケーキかつ喰らうしか道のない落ち武者しかいないって話じゃなかったのかよう……………なんであんな信長みたいなのがいやがるんだよおおおおおお。

それともアレか? あたしも前述のコンボを使いこなせてたらこうは行かなかったとでも言うのか?

あたしが恭介にあんな、こ、と、を……………

「無理だあああああ……………!」

「……………!?!?」「……………ビククーン!

「無理無理無理絶対完璧超中学級の絶望的に無理iiiiiii!」

そんなしたらあたし、あたしはあああああ！！」

「お、おいどうした何があった！？　なんでさやかちゃんはこんなに荒ぶってるんだ！？」

「大丈夫ですよいつものことだから。ほーらさやかちゃんこっちおいでー」

「ふええもうダメだよおまどかああああ仁美に恭介を取られちゃうよおおお……」

「大丈夫、大丈夫だよさやかちゃん
あとよくわかんないけどそのセリフはまだ早すぎ気がするよ？」

「まどかあああ……」ダキッ

「ふふ、さやかちゃんったら赤ちゃんみたい」

「……あんまし柔らかくないいいいいいい」

「……わたし最近タツヤと一緒に古いロボットアニメ見てるの、
それで今見てるのが鋼鉄……」

「オイ馬鹿やめろ」

む、何やら背中にヒュッ、とするものが走った。このままでは『
死ねえ！』とばかりに全滅させられてしまいそう……よくわからん。

まあ、とにかく、なんにしろ、もう十分泣いたしそろそろあたしも

復帰しますか。いい加減話も進まんし。
つてかあたしの慟哭のせいで真司が離れちゃってマミさんが凄
いシヨボン又なことなってる何アレかわいい。

「……オイお前たち、いくらなんでもうるさいぞ」

「あつ、すみません……」

奥から出て来た男の人が声こそ荒げないがそれでも不機嫌と分かる調子で睨んできた。

それに対してしょんぼりしながら謝ったのはメリーさん。特になんもしてないのにね、損をしそうな性格である。まああたしらのせいなんだけども。

さて、いきなり『奥』とか『男の人』とか謎のワードの羅列に眉を潜めてしまった方も多いだろう、だがもう少しだけ待ってほしい。そう間もなく諸君らの欲する情報が舞い降りてくるはずだから。

「この町のあらゆる交番、更には本庁にまで連絡をとったが、生憎と探し者は何処にも届けられてはいなかった」

「そうですか……」

男の人の言葉にメリーさんはまたもシヨボンと肩を落とした。頭を垂れることで髪が僅かに乱れたメリーさんを見たあたしの胸には『乱れ髪』という言葉にエロスを見出だした先人達を声を大にして称賛したいという衝動が氾濫していたが気合いの堤防建設でグツと

押さえ付ける。さやかちゃんってば空気読める子

とにかく、今の彼の言葉で状況は理解して頂けたことだろう。

そう、サンタのプレゼント探しなんて言う幻想的なイベントに遭遇したあたしが真っ先に取ったのは『交番に駆け込む』という現実的極まりない行動だったのだ。文句を言うなよ夢じゃ飯は食えないんだよしゃーないじゃん。

ここには届いていないという言葉を受けてなお食い下がるあたし達に、以外にも駐在さんたる彼は協力的に接してくれた。

様相こそ狂っちゃいるが中身はむしろまともであつたらしい。見た目はホントに可笑しいが。

なんでそんなに真っ赤なんだ警察もクリスマスフェア取り入れたのか浮かれてんなオイ。

「念のために確認するが、探し物と言うのは……」

「それぞれ赤、緑、青のボックスで、リボンの色は全て銀、ですよねメリーさん？」

「はい、おっしゃる通りです」

「ふむ、それで…その…サイズが……」

男の人が言い淀む、訂正、少し変えよう。男の人『だから』言い淀む。

視線をあつちやこつちやと行き交わせ、顔色の赤みがかかるは纏った服に勝るほど。いくらなんでも愉快に過ぎる、一家に一台ほしいぐらいだ。

しかし彼もやはり大人なようで、ゴホンと一つ咳を払えば、そこに

はクールな警官一人、覚悟を決めた顔をして、

「そ……その金髪の彼女の乳房と大体同じ大きさなんだな！！
？」

「はいオツパイです！」

「ぶふうっ！？」

あたしの鋭いカウンターに男の人は一発陥落一撃必殺………なんでかエロいなこの表現。

「さやかさん！？ ああああなたそんな変な表現を！？」

「だってあまりにちょうどよかったし、むしろママさんのオツパイがプレゼントでも嬉しいぐらいですし」

「よこせー詰まったロマンをよこせー」

「まどかさんまで何を言い出すの！？」

超局地的バイオハザード………否、パイオツハザードの発生を確認。
………我ながら小学生の並のセンスだなこれは。

「おい待ていい加減落ち着け！！」

「え、何？ 『その乳は俺のもんだ』って？」

「言っとらんよそんなこと！？」

「……………言ってくれないの？」

「……………聞こえなかった！！ 何も聞こえなかったぞ俺は！！！！」

「み、皆様！ どうか落ち着くようにお願いします！！」

「止めてくれるなメリーさ……………」

「どっかどっかそうおっしやらずに……………」ボンッ

「今戦わずしていつ戦……………」

「ああどっしましよっどっしましよっ……………」キュッ

「いや別にわたしは騒いで……………」

「あわあわあわあ……………」ポーンッ

「……………潔く腹を斬ります……………」

（女子全員からほとばしるまでの敗北オーラがっ！！！？）

「えっ、いや、そこまでして頂く必要は……………」

畜生なんだよあれなんなんだよあれなんであんな中二男子の妄想から生まれたような身体付きしてんのよそのくせなんであんなにサントラルック似合ってたんだよ訳がわからないよ訳が分からないよ

「訳が分からないよおおお！！」

「分からないよー！」

「と、とにかく元気だせよマミちゃん」

「……あなたには分からない」

「ここでそれ使う!？」

「振り切るぜ振り切るぜ振り切るぜ振り切るぜ振り切るぜ……」

「よし、は、話を……戻して構わんか……?」

パイオツハザードがダイナマイト投下で鎮圧されたタイミングで、駐在さんも帰還なされた。しかし話を戻すと言っても、もう確かめることは確かめた。

メリーさんの落とし物は、見滝原のどこにも届けられてはいなかった。無情な事実について息を吐き出す。残念、というよりも、『やはり』と言ったニュアンスを多分に含んでしまう。

今のご時世、わざわざ交番まで拾い物を届けにくるようなお人柄は、

「失礼、どなたかいらっしやいますか」

……冷たく、凜と張り、聞き覚えのあってしまう声が、交番に走った。

「む、ああ居るぞ、どうかしたか？」

全くもって不躰な口調で駐在さんは返す。いつもなら何かしらのツッコミを入れているところだが、あたしは口を噤んでいた。だって今回に限っては、こいつに限っては、あまりに妥当なことだったから。

「何があった、というわけでは「ほむらちゃんだあ!!」……ありませんが……」

まどかの嬉しそうな声にそいつ、暁美ほむらはほんは少しだけ眉を動かした。その右脇には、ちょうどマミさんの程のボックスが抱えられていた。

-
-
-

「本当にありがとうございます！ 暁美さん！ 貴女のおかげで助かることができました!!」

「気にしなくていい、ただの偶然と気まぐれだから」

「でもですがされども！」

「……とりあえず落ち着きなさい、それが一番ありがたいわ」

「は、はい分かりました！ 靴下が一足、靴下が二足………」

「それで落ち着くのか……」

「多分あれがサンタ風なのよ」

「三足四そ……あれこれ片っ方ない！？ ちょっとお母さん

！……」

「ちつとも落ち着いてなかった……」

盆と正月が一辺に来れば大慌て、正月とクリスマスが一辺なら喜ばしいこと。だったら正月と葬式が一辺に降って湧いたら、一体どんな顔をすればよいのだろう。

今のあたしがまさしくそんな状況なのだが、どれだけ経っても答えは分からなかった。

転校生が交番に届けにきたボックスは、ご都合的にもあたしらの探しているそれだった。リボンの色は赤、これで残すは後二つ。そして更にご都合的なことにサンタのプレゼントボックスは特別製で、互いの距離が近づくとリボンが鈍く光り、さらにサンタたるメリーさんには大体の方向が分かるらしい。

しかしやはり『大体』は『大体』であり、はつきりと断言することは出来ないため、結局は歩き回って探すしかないようだ。

そんなだつたららいつそ別に探知器でも作った方がいいんじゃないかねと思っただけど多分これツツコんだら負けなヤツだから黙つといた。

そんなこんなであたし達は交番を後にして次のプレゼントを光を頼りに探し歩いている。

当然のように転校生もついて来ているが、これはまどかが激しく駄々をこねた結果だ。現在進行形で転校生の腕に絡み付いている。まどか年末Verは本能と煩惱が解放される傾向があるので、きつと心の奥ではずっとこうしたいと思っていたのだろう。正直言っただけかなり複雑な気分だ。懐いてた猫取られ（略してネトラレ）たような、そんな感じ。

「……………鹿目まどか、いい加減熱苦しいわ」

「わたしは暖かいよ!」

「ああ……………そう」

うおうすげえあの転校生からちょっとだけ困ったオーラが出てる。全力まどか恐るべし。

「あつ、そうだほむらちゃん。今日のこと考えててくれた?」

「パーティがどうという話かしら」

「うんそうだよ!」

爛漫とした笑顔を咲かせながらのまどかの言葉に、転校生はそれさえ一瞬で枯らせそうな冷たい息をたっぷり一秒間吐き出して、

「……………今日はクリスマスだったわね」

「うん、だから…」

「でも魔女共にそんなものはないわ」

ピシヤリという擬音の似合う、扉を閉じてしまつような言葉を吐き捨てた。

「聖夜だろうが仏滅だろうが、いつそ世界が滅ぼうが、奴らの頭にあるのは、人を喰らい、己を満たすことだけよ
城戸真司はともかく、巴マミがそのパーティとやらに参加する以上、誰かがその皺寄せを担う他なくなるわ。そして、わたしがそれを引き受けた。もうすでに一度話したと思うけれど」

「……………うん、ごめん」

クリスマス、多くの人が夢を描き、時に与える聖なる日。そんな空気にどっぷり浸かっていたまどかに現実を叩きつけることがどれだけ無慈悲なことか、こいつはきつと分かっている。分かったうえで、一切の躊躇なくそれを敢行しやがる。

勢いそのまま食ってかかりそうになるが、転校生の言うことはあまり

に正論で、何より拒絶されてなお離れようとしなймаどかがあまりにいじらしくて、結局心中で聞くに耐えない悪態を吐き散らかすに留まった。

「ほむらちゃん、もう一回聞くけどさ、俺の手伝いは……」

「必要ない。安心して、余程強力な個体が現れたら容赦なく呼び付けるから」

「あ、ああ分かった。ありが、とう……?」

「ほむらさんごめんなさい。本来なら、わたしも付き添うべきなのだけど……」

「後ろ髪引かれながら来られても邪魔なだけよ」

「……返す言葉もないわ。本当にありがとう」

「??? 皆様方、一体何の話をされているのですか?」

「気にする必要ねーっすよ、メリーさんには関係ないことですし」

「むう、少し寂しく覚えます……」

つい雑に言い放ってしまった言葉にやってしまったと心の中にて顔を手で覆う。これじゃあ、さっきまで責めていた転校生の態度そのものじゃないか。

疎外感に唇を尖らすメリーさんを見るとほんのり罪悪感が湧いてく

る。

ダメだダメだこんな空気は。イケないイケないこんなテンション。今日はせつかくのクリスマス、もっとゲインを上げて行かなければ！

「えーそれではここでちよいとさやかちゃんの爆笑ジョー」・・・
「あれ、そんな揃い踏みで何やってんのお前ら」

つてオイ誰だあたしの抱腹絶倒天魔招来の究極ジョークを潰すやつは！！ めんどくさいタイプの先輩芸人か！？

しかしやしかし、現れたのは先輩芸人ではなく、ましてやさっきから一切の出番のないキウウベえでもない。

だがある意味では上記二人を遥かに越える面倒臭いお方、

「教頭先生！？ 珍しいっすね学校以外で会うなんて」

「そりゃまあ、仕事以外でお前に会いたいなんて思わないし」

「ふ、普通にひでえ」

我等が三滝原中学校の教頭先生であらせられる……名前なんだっけ。

まあとにかく、教頭先生その人があたしらの前に現れた。

「さやか、お前早乙女ちゃんに頼んで年明けに補習入れてもらう

わ

「なぜにホワイ!?!」

「教頭先生こんにちはー!」

「こんにちはは、やけに元気がいいな鹿目」

「お久しぶりです教頭先生」

「ああ久しぶり巴、城戸になんもされてないか?」

「いやするわけないでしょが、なあマミちゃん?」

「……いつも通り、こんな感じですよ」

「ああ…まあ頑張れ」

「えっ、何その反応」

各々が挨拶と言葉を交わすなか、転校生とメリーさんだけはじつと押し黙っていた。

メリーさんは仕方ないと思う。面識もないのだから戸惑いもするだらうし。

でも転校生はダメなんじゃない? ガツコの先生にぐらい挨拶しないと。まあ言ったところで聞かないんだろうけど。

「しっかしホント大所帯だね、何やらかすつもりなわけ?」

「言い方に悪意を感じるんですが……」

マミさんが苦々しく呟いても、教頭先生は胡散臭いものを見る目であたし達を……いや違うわ、ありや完全に真司一人をロックオンしてる。更に言えば胡散臭いのを疑うのはフェイクで、その奥に獲物を前に舌なめずりする猫みたいな雰囲気……

知ってるかい？ 猫ってヤツは狩りをする時獲物を生かさず殺さず痛ぶり遊び倒してからトドメをさすんだぜ？

何が言いたいのかってーとご愁傷様です真司君。

「さて……通報するか」

「はぁいい！？ちょっと 何言いだすんスか何がさてなんですかちよつとお！？」

「生徒でハーレム作って悦に浸るようなヤツだとはさすがに思わなかったが……安心しろ、雇い主として最後までキッチリ引導渡してやる」

「何の話だよどうやってたらそんな訳分かんない発想が出来るんだよあんたはホントに……！」

「訳分かんない？ だったら多数決とって見ようか」

城戸真司が変態だと思ってる、手え挙げ」

「はんっ、何言ってるんですかそんなの誰も挙げるわけが……」

「ハイハイハイハイハイ！！」

「ハイっ！」

「は、はい……」

「ここぞとばかりにノッて来やがったあー！ー！！？」

「め、メリーさん？ どうしたんです急に？」

「なんの話かはよく存じませんが、さやかさんから手を挙げるよ
うこと……」

「卑怯だろそんなのお！！」

「勝てばよかるうなのだよ真司くーん」

「歴史とは所詮勝者の日記に過ぎーん！」

「くそう……ってか絶対まどかちゃんは良く分かんないままに挙げ
ただろ……」

ガツクシいく真司、必死で慰めるマミさん。ああなんと麗しい映
像でしょう。どうかせいぜい我々の及び知らぬ場所で未永く爆発し
てやがって下さいませ畜生。

「……教頭先生」

「ん？ なんだ曉美、お前喋れたのか」

ずっとだんまり決め込んでたにも関わらず、急に転校生が声をあげた。

教頭先生お得意の皮肉も無敵鉄壁なホムラマスクの前には歯が立たないようで、転校生は表情を微動だにさせず転校生は言葉を続ける。

「この箱と似たものを、何処かで見たり拾ったりしませんでしたか？」

いいながらメリーさんが抱えるプレゼントを指差した。なるほど、どうやらこいつは教頭先生の絡みが面倒臭くなったからさっさと話を切り上げたくなったらしい。

そうでなければ、こんな投げやりな質問は選ばないだろう。むしろここでイエスって返ってきたらそれどんなご都合……

「……ああ、そっぴや今日学校で見たねそんなの」

……我々には尊大な態度の手羽野郎の守護霊でも憑いているんじゃないだろうか。『世界はわたしのために廻っている！』ってな具合に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8148z/>

仮面ライダー×魔法少女 龍騎&まどか クリスマス特別編 聖夜に舞うは幸せの

2011年12月25日23時52分発行